

J.LEAGUE NEWS



J.LEAGUE

編集・発行
社団法人日本プロサッカーリーグ
ホームページ <http://www.j-league.or.jp>

スポーツで、もっと、幸せな国へ。Jリーグ百年構想

Vol. 142

30.Nov.2007



2007 Jリーグ ヤマザキナビスコカップ

Will Be
J.LEAGUE



© J.LEAGUE PHOTOS

表彰式終了後、Jリーグヤマザキナビスコカップ初優勝の喜びに浸るG大阪の選手、チームスタッフ、クラブ関係者

G大阪が川崎Fに競り勝ち初優勝を遂げる

安田理大 (G大阪) がMVP賞とニューヒーロー賞を獲得

2007 Jリーグヤマザキナビスコカップ決勝は11月3日、国立競技場に4万1569人の入場者を集めて行われ、ガンバ大阪が接戦の末に川崎フロンターレを1-0と破り初優勝を成し遂げた。優勝したG大阪には、Jリーグカップ (チェアマン杯)、ヤマザキナビスコカップ (スポンサー杯、ティファニー社製)、優勝賞金1億円、優勝メダルが、準優勝の川崎FにはJリーグ盾、準優勝賞金5000万円、準優勝メダルが、それぞれ授与された。また、前夜祭でニューヒーロー賞に輝いたばかりのMF安田理大 (G大阪) が、MVP賞も獲得。クリスタルオーナメント (ティファニー社製)、賞金100万円、ヤマザキナビスコ製品1年分が贈られた。

オフィシャルスポンサー



ネットワークパートナー



Jリーグ百年構想パートナー



リーグカップスポンサー



エキップメントサプライヤー





© J.LEAGUE PHOTOS

均衡を破るゴールを決め、チームメートの祝福を受ける安田(中央、13番)。彼にとって公式試合における初得点が、チームにビッグタイトルをもたらした

2007 Jリーグ ヤマザキナビスコカップ

決勝の醍醐味。初優勝へのし烈な攻防

それぞれ2002年、2005年のJリーグヤマザキナビスコカップにおいて、準優勝に甘んじた川崎フロンターレとガンバ大阪。同カップの初優勝を目指すチームの対決は決勝にふさわしく、選手たちが高い集中力を発揮し、緊迫感に満ちた白熱の展開となった。最後まで予断を許さぬ攻防は、サッカーの醍醐味にあふれたものだった。

緊迫した雰囲気の中で

川崎F、G大阪とも、攻撃的なサッカーを持ち味とするチームだ。前者は2007 Jリーグヤマザキナビスコカップ準々決勝以降の4試合で12得点を挙げ、8強の中では最多得点。後者も首位争いを続けるJ1リーグ戦で、最多得点を記録していた。

このような事実から、ゴールの応酬への期待もあったが、両チームとも相手の気合十分の守備の前に、容易には決定機をつかめなかった。だが、攻撃への意欲は衰えず、川崎Fはキックオフから10分余りで5本のシュートを放ち、それをしのいだG大阪もFWマグノアウベスらが積極的に相手ゴールを脅かした。

敗れてもおチャンスのあるホーム&アウェイ方式の予選リーグ、準々決勝、準決勝とは異なり、決勝は1試合で決着がつく。それだけに、選手たちの集中力も高く、わずかなミ

スも許されない緊迫した雰囲気が漂う中での攻防。スタンドのファン・サポーターは、それぞれのチームの勝利を願って熱い声援を送りながら、手に汗握る展開を堪能したことだろう。

両チームの攻撃的姿勢

G大阪が均衡を破ったのは、後半の開始から10分後だった。右サイドに開いたFWバレーのパスを、ゴール前に走り込んだMF二川孝広が合わせようとしたが、ボールは後方へ。そこへ詰めたのが、DFとして出場の安田理大だった。彼をマークしていたMF森勇介が「あっと思った瞬間に前に入られた」という俊敏さでボールに触れ、ゴールに押し込んだ。

きつ抗した戦いでは、流れを引き寄せる監督のさい配も注目されるが、この得点は西野朗監督の指示が実を結んだものでもあった。「積極的にフィニッシュに絡んでいくように」と、

安田の攻撃参加を促し、「自分の持ち味を出せる」(安田)、より相手ゴールに近いポジションに移った彼は、見事にその期待に応えた。

クラブ史上初のビッグタイトルを目指す川崎Fも、西野監督に「明らかにスタートから主導権を握られた試合だと感じていた」と言わしめるほど、G大阪を押し込んだ。J1の得点ランキング首位に立っていたFWジュニーニョは、この一戦で最多の6本のシュートを放つなど、相手に脅威を与えた。だが、MF明神智和の体を張った守りや、GK藤ヶ谷陽介の好守にあい無得点。「最後の決定力、精度が欠けていた」と振り返った関塚隆監督だが、タイムアップまで勝負をあきらめない姿勢で試合を盛り上げた。

見応えのあった「個」の戦い

個性豊かな選手たちの攻防も、この決勝の大きな見どころだった。得点力のあるストラ

川崎フロンターレ 0 1 ガンバ大阪

【得点経過】

55分 0-1 (G) 安田 理大

【入場者数】4万1569人

【主審】吉田 寿光

【副審】山口 博司/宮島 一代



© J.LEAGUE PHOTOS

チームカラーで彩られたスタンド(上が川崎F、下がG大阪)



© J.LEAGUE PHOTOS

広範な動きで川崎Fの攻撃をリードしたジュニーニョ



© J.LEAGUE PHOTOS

シジクレイ(左、G大阪)、鄭大世(右、川崎F)の迫力ある空中戦

イカー、能力の高いMF陣、フィジカルに優れたタフな守備陣と、各ポジションの力は甲乙つけがたい。

中でも圧巻だったのは、G大阪の左サイドでプレーした安田と、彼に対抗した川崎Fの森による一騎打ち。森が思い切ってドリブルで仕掛ければ、安田がスライディングタックルで阻止。あるいは、安田の突破を、森が必死に食い止める。サイドにおける両者のし烈な攻防は、非常に見応えがあった。

今大会のニューヒーロー賞に選出された安田について、Jリーグ技術委員会の山下則之 技術委員長は「個の技術の高さと戦術レベルの高さで観客を魅了してくれると思う。その先に(公式試合の)初得点が生まれることを大いに期待したい」とのコメントを寄せているが、それが決勝という大舞台上でまさに現実のものとなったわけだ。

タイトル獲得へのあくなき意欲、勝利への強い意志が、ピッチ上で激しく交錯した試合は、ファイナルにふさわしい内容だった。もちろん、予選リーグから準決勝までに演じられた多くの好試合が、このひのき舞台の価値を高めていることも忘れてはならないだろう。



© J.LEAGUE PHOTOS

西野 朗監督 (G大阪)

「ハーフタイムに全員が切り替えて、後半はうまく戦ってくれたと思う。リスクを負って臨み、いい形で点を取ることができた。守備に対する高い意識を持ちながら、うまく試合を運んでくれた。楽に勝ち上がってきたわけではないが、(浦和)レッズ、(鹿島)アントラーズという強豪を破ってきた自信があったのかもしれない。予選リーグ、決勝トーナメントを通して、多くの選手が出場して戦ったチーム力を最後に発揮し、チームの成長を感じることができて非常にうれしい」



© J.LEAGUE PHOTOS

関塚 隆監督 (川崎F)

「勝負のことを考えれば、前半に先制するチャンスがいくつもあったので、それを決めて、われわれのリズムに持っていきたくかった。それができず、後半にちょっとしたすきから先制されてしまった。決定的なチャンスは、われわれのほうが多くつくれたと思うが、(G大阪に)うまく90分を運ばれてしまったように感じる。ただ、川崎Fのサッカーを決勝の場でしっかりと見せられたと思うし、これからはまた、クラブとしてタイトルに向けて一步一步、前進していけたらと思う」

ニューヒーロー賞&MVP賞 安田理大 (G大阪)

決勝の前夜祭で発表されたニューヒーロー賞と、決勝終了後に発表されたMVP賞を受賞したのが、G大阪の安田理大だ。予選リーグから準決勝までを通じて活躍が顕著だった23歳以下の選手(大会開幕時/2007年3月21日)に与えられるニューヒーロー賞は1996年に始まったが、MVP賞とのダブル受賞は2003年の浦和FW、田中達也に次ぐ2人目。

前夜祭では「あすは優勝して、真のニューヒーローになりたい」と語っていた19歳は、素晴らしい活躍を見せて勝利に大きく貢献し、見事にその望みをかなえた。試合後の安田は「これまでの人生で、これほど最高の日はなかったのでは。自分で点も取れたし、予選リー

グから(チームの)みんなで戦ってきたというのもあるし、本当に最高に気持ちがいい」と声を弾ませた。



© J.LEAGUE PHOTOS



© J.LEAGUE PHOTOS

「天下分け目の決戦」 鬼武健二 Jリーグチェアマン

「厳しい戦いであったが、レベルの高い、いい試合だった。Jリーグヤマザキナビスコカップが初めて天竜川を渡った。ガンバ大阪は一昨年、悔し涙を流し、思いを果たしたということであろう。川崎フロンターレにも、またぜひ、次の機会を狙ってほしい。川崎フロンターレを開東、ガンバ大阪を開西とすれば、天下分け目の決戦となった」

2007 Jリーグヤマザキナビスコカップ 決勝 アラカルト



© J.LEAGUE PHOTOS

JR京浜東北線の車内に掲出された告知広告

決勝告知ADトレインを運行

決勝の告知のため、10月28日から11月3日の期間、JR京浜東北線の大船と南浦和の間でADトレインを運行した。掲出される広告は、スポーツ新聞6紙とサッカー専門誌5誌の合計11社の協力を得て制作され、各社の特長を生かし、趣向を凝らしたデザインとなった。

大会アンセムが初お披露目

両チームの選手たちは、大会アンセムが流れる中に入場した。このアンセムを制作したアーティストのm-flo☆Taku氏は前夜祭で「試合開始は、選手にとっても、ファン・サポーターにとってもすごく大事な瞬間。これから何が起るかの期待や自分の(応援する)チームが勝ってもらいたいという気持ちが詰まっている中、少しでもその状況をより華やかに演出できれば」と、そのコンセプトについて語った。



© J.LEAGUE PHOTOS

大会アンセムが流れる中に入場する選手たち

「ナビスコキッズバトル」を開催

決勝の舞台となる国立競技場のピッチでは、キックオフ前に恒例のナビスコキッズバトルが行われた。決勝に進出した両チームをサポートする「ナビスコキッズイレブン」がドリブルゲーム、シュートゲームに挑戦。参加者は、本大会の予選リーグから準決勝の各会場において実施された「クラブといっしょにコクリツを目指そう!!」に参加した小学生の中から選出された。



© J.LEAGUE PHOTOS

予選リーグからチームを応援してきたナビスコキッズイレブンにとっても晴れの舞台

大会 AFCチャンピオンズリーグ2007 浦和が初優勝。アジアの頂点を極める

Jリーグからアジアへ、そして世界へのチャレンジ



AFCの優勝トロフィーを掲げる浦和のゲームキャプテン、鈴木。Jリーグの力を国際的にも強くアピールする快挙だった

AFCチャンピオンズリーグ(AFC)2007の準決勝で昨年のチャンピオン、城南一和(韓国)をPK方式の末に下し、浦和レッズは辛くも決勝に進出した。優勝をかけて対戦したのは、準々決勝で川崎フロンターレに、やはりPK方式で勝ったセパハン(イラン)だった。

第1戦は11月7日、セパハンのホームで行われた。日本からも数多くのファン・サポーターが現地に着き、彼らの期待に応じて44分にはMFポンテが鮮やかなミドルシュートで先制。後半開始すぐに同点とされたが、その

後は相手の攻撃を粘り強くしのぎ、1-1の引き分けでホームの第2戦を迎えた。

埼玉スタジアム2002に5万9034人の入場者が詰め掛けた第2戦は、22分にFW永井雄一郎が決めて再び浦和がリード。後半に入るとセパハンも反撃に転じたが、「今日は重要な役割を果たしてくれた」(ホルガー オジェック監督)という守備陣が健闘し、71分のMF阿部勇樹の追加点で2-0の勝利。対戦成績を1勝1分とし、「夢を現実にできた」(DF田中マルクス闘莉王)瞬間が訪れた。

この大会がACLと改称した2002年以降、川崎Fとともに日本のチームが予選リーグを突破したのは初めてであり、言うまでもなく初のアジア制覇である。優勝の大きな要因の一つとなったのは、1勝5分と無敗で乗り切ったアウェイゲームの好成績だろう。リーグ戦の合間を縫っての長距離の移動と試合は、肉体的にも精神的にも少なからぬ負担となるが、それを克服した選手たちの強さは称賛に値する。

川崎Fもアウェイで無敗だったが、こうしたチームの健闘を側面から支援したのが、日本サッカー協会とJリーグが今年から立ち上げた「ACLサポートプロジェクト」だった。専門のチームを組み、資金面の援助だけでなく、スタッフが事前に、あるいはチームに帯同して現地へ行き、少しでも戦いやすくなるような環境の整備に奔走した。つまり、日本サッカー界の総力を挙げてのサポートが、実を結んだともいえるだろう。

浦和はこの優勝によって、次回大会は準々決勝からの出場となり、さらに日本から2チームが予選リーグに参加する。Jクラブの実力を名実ともに示したアジア制覇は、他のクラブにも大きな刺激となり、Jリーグ加盟を目指すクラブの大きな夢ともなる。Jリーグでチームが競い合い、個々の選手が能力を高めることによって、アジア、そして世界への門が開くことを実際に証明したのが、今回のACLだった。



阿部(左)、田中マルクス闘莉王(中央)ら、守備陣の健闘も光った



大会のMVPにも輝いた永井



浦和のファン・サポーターも最高のパフォーマンスでチームを後押しした

決勝第2戦後のコメント

鬼武健二 Jリーグチェアマン

「すごいことをやってくれた。歴史に偉業を残してくれたと思う。今年は新たにACLサポートプロジェクトも立ち上げ、Jリーグとしてもやりがいがあった。将来に向かって大きな礎となるだろう。日本サッカーにとっても、Jリーグにとっても、素晴らしい未来を感じさせてくれた。サポーターも素晴らしかった。クラブと一体となり、選手たちも大きな力をもらったことだろう。

日本全国に今はまだ卵のようなクラブもたくさんあるが、彼らにとっても大きな励みとなるだろう。来年は3チームがACLに出られるが、海外と戦っていかなくては強くなっていけない。トップから若い世代まで、どんどん海外に出てほしい」

犬飼基昭 Jリーグ専務理事(AFCサポートプロジェクトリーダー)

「あのレッズがここまでいけたということが本当にうれしい。クラブとサポーターが一体となり、サッカーとはあいうものだということが多くの人たちに伝わったのではないだろうか。

ACLサポートプロジェクトについては、すぐに結果が出るという、うれしい結果となった。アジアを獲らないことには、今後Jリーグの位置を上げていくことはできない。他のJクラブも、おれたちもがんばれば、という気になったことだろう。来年はもっと激しいJリーグになるだろうし、皆がアジアを狙ってくるようになってほしい。そのために何をやるか。今回のレッズの優勝は大きな刺激になったと思う」

TOYOTA プレゼント FIFA クラブワールドカップ ジャパン 2007



Jリーグ、そしてアジアを制し、いよいよ世界のひのき舞台に立つ浦和 (写真はACL決勝第2戦)

浦和レッズはAFCチャンピオンズリーグ(ACL)2007の優勝により、12月7～16日に日本で開催される「TOYOTAプレゼントFIFAクラブワールドカップ ジャパン 2007」へ、アジア代表として出場する。この大会は基本的に、世界の6地域サッカー連盟のクラブ選手権優勝チームによって争われ、クラブの世界一を決める。現行方式となったのは2005年からで、いずれも日本が開催国。今年から開催国枠が設けられ、J1リーグ戦の優勝チームに出場権が与えられる予定だった。しかし、大会規定は同一サッカー協会に所属する複数チームの出場を認めておらず、浦和がアジアの代表権を獲得したため、ACL2007準優勝のセパハン(イラン)が開催国枠から出場することになった。浦和は準々決勝に当たる初戦で、このセパハンとオセアニア代表のワイタケレ・ユナイテッド(ニュージーランド)の勝者と対戦。この試合に勝つと、準決勝で欧州王者のACミラン(イタリア)と決勝進出をかけて戦う。

Jユースサハラカップ2007 第15回Jリーグユース選手権大会 決勝トーナメント組み合わせ決定

各地で熱い戦いを繰り広げていた「Jユースサハラカップ2007 第15回Jリーグユース選手権大会」予選リーグが終了し、決勝トーナメント進出チームが決定。決勝トーナメントの組み合わせが、右表のように決まった。

Jユースサハラカップ2007 第15回Jリーグユース選手権大会 決勝トーナメント組み合わせ								
1回戦	2回戦	準々決勝	準決勝	決勝	準決勝	準々決勝	2回戦	1回戦
12/2 (日)	12/8 (土)	12/16 (日)	12/22 (土)	12/24 (月・祝)	12/22 (土)	12/16 (日)	12/8 (土)	12/2 (日)
横浜F・マリノス (Bグループ1位)	12/9 13:00 MM21	11:00 万博	13:30 (予定) 長居	14:00 神戸ユ	14:00 フクアリ	12/8 13:00 江戸川	14:00 市原	FC東京 (Dグループ1位)
愛知FC (JCY)	11:00 市原							千葉SC (JCY)
ガンバ大阪 (Fグループ2位)	12/9 14:00 瑞穂陸							ジェフユナイテッド千葉 (Aグループ2位)
名古屋グランパスエイト (Gグループ1位)								大分トリニータ (Eグループ1位)
サンフレッチェ広島 (Eグループ2位)								鹿島アントラーズ (Cグループ2位)
柏レイソル (Cグループ1位)	12/9 13:00 柏	11:00 フクアリ						セレッソ大阪 (Fグループ1位)
浦和レッズ (Dグループ2位)								FCみやぎバルセロナ (JCY)
東京ヴェルディ1969 (Aグループ1位)	12/9 14:00 ヴェルディG							大宮アルディージャ (Bグループ2位)
エストレラ姫路FC (JCY)								京都サンガF.C. (Gグループ2位)

※JCY:日本クラブユースサッカー連盟

2007 Jリーグアウォーズ 功労選手賞

Jリーグは11月20日に開催した理事会において、元Jリーグ選手の本田泰人、アマラオおよび城彰二の各氏を、2007 Jリーグアウォーズ功労選手として表彰することを決定した。表彰式は12月17日に横浜アリーナにて開催される2007 Jリーグアウォーズの中で行われる。

【功労選手賞 日本人選手選考基準】

原則として以下の基準を満たし、Jリーグおよび日本サッカーの発展のために貢献をしたと認められる者を功労選手として表彰する。

- 所属クラブより推薦があり、次の大会の合計試合出場数が500試合以上の者
- J1リーグ戦、J2リーグ戦、リーグカップ戦(Jリーグヤマザキナビスコカップ)、天皇杯全日本サッカー選手権大会
- その他Jリーグ公式試合(J1参入決定戦、ゼロックス スーパーカップ、サントリーチャンピオンシップ、オールスターサッカー、JOMO CUP Jリーグドリームマッチ、SANWA BANK CUP、サントリーカップ)
- Jクラブが参加するFIFAおよびAFCの国際試合(アジアクラブ選手権、アジア・カップウィナーズカップ、アジアスーパーカップ、アジア・アフリカクラブ選手権、極東クラブ選手権、AFCチャンピオンズリーグ、A3チャンピオンズカップ)
- 日本代表の公式試合(国際Aマッチ)

【功労選手賞 外国籍選手選考基準】

- 所属クラブより推薦があり、次の大会の合計試合出場数が200試合以上の者
- ④を除く①～③は、日本人選手選考基準と同様
- 母国のA代表選手として活躍した者

1. 本田 泰人 (ほんだ やすと)

1969年6月25日生(38歳) 出生地:福岡県 ポジション:MF (所属クラブ) 1988～1992年 本田技研、1992～2006年 鹿島アントラーズ

2. アマラオ (本名:ワーグナー・ベレイラ・カルドーゾ)

1966年10月16日生(41歳) 出生地:ブラジル ポジション:FW (所属クラブ) 1992～1998年 東京ガス、1999～2003年 FC東京、2004年 湘南ベルマーレ、2005年 FCホリコシ、2006年 アルテ高崎(8月より選手兼監督)

3. 城 彰二 (じょう しょうじ)

1975年6月17日生(32歳) 出生地:北海道 ポジション:FW (所属クラブ) 1994～1996年 ジェフユナイテッド市原、1997～1998年 横浜マリノス、1999年 横浜F・マリノス、2000～2001年 横浜F・マリノス、2002年 ヴィッセル神戸、2003～2006年 横浜FC

Jリーグ U-13、同U-14のリーグ戦を開催

Jリーグは、出場機会の少ない年代に定期的な試合出場の場を提供し、個の育成を行うことを目的とし、2007年度よりJリーグ加盟31クラブの第3種チーム所属の選手を対象としたU-13リーグ戦をスタートさせた。全国を5ブロックに分け、原則としてホーム&アウェイ方式で開催するが、2008年度は参加チームを49チームから約70チーム(予定)に増加させて開催する。

また、2008年度からは「Jリーグ U-14」の実施も決定した。今後「Jリーグ U-13」および「Jリーグ U-14」をモデルに他のカテゴリーに順次展開し、地域におけるリーグ戦文化構築に寄与していく。

2008 Jリーグ U-14 大会概要				
大会名称	Jリーグ U-14	ブロック分け	ホリス	北海道・東北・北信越
主催	社団法人 日本プロサッカーリーグ		メトロ	関東
開催期間	2008年4月～2009年3月		ボルケーノ	東海
試合日程	当該チーム同士で調整		ヤマタケル	関西・徳島
参加チーム	Jクラブチーム、既存の参加タウンクラブチーム	参加チーム数	サザンクロス	中国・四国・九州
大会方式	以下のうち、ブロックごとに決定。 ① ホーム&アウェイ方式による2回戦総当たりリーグ戦 ② ホーム&アウェイ方式およびセントラル方式による2回戦総当たりリーグ戦 ③ ホームorアウェイ方式による1回戦総当たりリーグ戦			

Jリーグの15年を振り返る

— 第8回 —

「国際化」

15年目を迎えているJリーグを、さまざまなテーマから振り返るシリーズも、最終回を迎える。第8回となる今回は、Jリーグの「国際化」にスポットを当てる。Jリーグの原点は欧州、特にドイツの恵まれたスポーツ環境だけに、常に国際的な感覚を基礎に、海外からの刺激を受けながら発展を遂げてきた。日々、進歩を続ける世界のサッカーからさらに吸収し、成長の糧(かて)としていくために、国際化はこれまで以上に促進されていく。

ドイツにおける強烈な印象

Jリーグの原風景は欧州にある。

1964年の東京オリンピックを4年後に控えて強化にまい進する日本代表チームは、西ドイツ(当時)のデュイスブルクで強化合宿を行った。白樺の林に囲まれた敷地には鮮やかな緑の芝生のピッチが8面、アリーナが3棟、さらに研修施設や宿泊施設、レストランなどが付随。これらの施設を利用し、子供たちが、車椅子に乗った人々が、思い思いのスポーツを楽しむ。これはスポーツシュレ(シュレは学校の意)と呼ばれる施設で、選手だけでなく、審判、指導者、クラブ経営者などの育成・強化の場となり、一般の老若男女も利用できる。

日本代表の選手たちは、当時の日本ではとても考えられない、夢のような光景に驚きを通り越し、大きなショックを受けたという。日本代表でさえ、国内では芝生のピッチでトレーニングをする機会がほとんどなかったという時代である。

この日本代表の一員だったJリーグ初代チエアマン、川淵三郎 現日本サッカー協会キャプテンは「こんな場所で毎日練習できたらサッカーが楽しくできるのに、早く上達するのに、と心底そう思った」と、「財団法人 日本サッカー協会75年史 ありがとう、そして未来へ」(1996年)の中で回想している。そして、当時の強烈な印象が、Jリーグの原点とも言うべきものとなった。

サッカーがグローバルなスポーツということもあるが、こうして、Jリーグは設立以前から、国際化が一つの大きなテーマとなっていた。Jリーグの理念の一つにも、「国際社会における交流及び親善への貢献」がうたわれている。

外国籍選手のプロ意識

開幕に向けて動き出したJリーグは、世界のサッカーのスタンダードを知らなければならぬという意識から、諸外国のサッカー事情、リーグ戦の仕組みなどについての情報を

収集し、分析し、日本に適した形で生かそうと努力を重ねた。そして、1993年5月15日、あの国立競技場における歴史的な開幕戦を迎えるのだが、サッカー先進国のスタンダードについて身をもって教えてくれたのが、欧州や南米からJリーグのクラブに加わった一流の外国籍選手たちだった。

その年には、ブラジルの伝説的なスーパーstar、ジーコが鹿島アントラーズにいた。1990 FIFAワールドカップで優勝した西ドイツの中心選手、リトバルスキーがジェフユナイテッド市原(現 千葉)に、1986 FIFAワールドカップの得点王、元イングランド代表のリネカーが名古屋グランパスエイトでプレーした。

その後も、浦和レッズにブッフバルト(ドイツ)、名古屋にストイコビッチ(旧ユーゴスラビア)、ジュピロ磐田にダウンガ(ブラジル)など、FIFAワールドカップなどで活躍した名手が加わり、Jリーグに対する国内外の関心は飛躍的に高まった。

だが、彼らの役割は、それぞれのチームを強化し、Jリーグの存在を広くアピールしただけではない。外国籍選手、外国人指導者は、そのプロフェッショナルな意識によって、日本人選手、Jクラブ、ひいては日本サッカー界に強烈なインパクトを与えた。日常的に彼らとプレーすることにより、技術レベルが上がったことはもちろんだが、私生活、心構えなど、日本人選手に世界のスタンダードを植え付けた。市原でクラブの立ち上げに携わり、フロント業務などを経験した羽生英之Jリーグ事務局長は「リトバルスキーの強烈なプロ意識は、日本人選手たちをどんどん変えていった。一言一言に重み、説得力があり、食事や環境面などについても、われわれが当然だと思っていたことが、異なる視点ではそうでなかったり、大いに勉強させられた」と振り返る。

海外で活躍するために

一流の外国籍選手がチームの強化に果たし



ストイコビッチ(名古屋、1994~2001年)

ジーコ(鹿島、1992~94年)

た役割は計り知れないが、子供たちにとってはあこがれの存在となった。そのプレーに胸をときめかせた彼らは、将来はJリーガーに、そして海外のクラブへと、夢を膨らませた。こうして育った優秀な選手たちはJリーグでさらに技術を高め、日本がFIFAワールドカップに初出場を果たした1998年以降、次々に欧州を中心とするクラブに雄飛していった。

羽生事務局長は「積極的に海外に出て、活躍してほしい」と選手たちにエールを送る。羽生事務局長は今年8~9月、Jリーグの理事・実行委員の欧州視察に同行し、スコットランドのグラスゴー、ドイツのオフエンバッハなどを訪れた。グラスゴーは、日本代表の中村俊輔が所属するセルティックのホームタウンである。

「グラスゴーの人々が、中村を通して日本と日本人に関心、興味をもってきているのは素晴らしいこと。彼は現地で非常に尊敬されているだけに、好意的に見てくれる。彼に続くような選手が現れてほしい」と、日本人選手が海外で果たしている重要な役割について述べる。また、「高原直泰、稲本潤一(ともにフランクフルト所属)の名前も出てくるが、『オクデラ(奥寺康彦、現 横浜FC代表取締役会長)はどうしている』と、よく聞かれた。プレーだけではなく、彼の人が愛され、尊敬されていた証拠」と、1977~86年にドイツのクラブで活躍した日本人プロ選手第1号の足跡を、オフエンバッハで確認した。

優秀な選手が海外のクラブに移籍することによって、Jリーグのレベル、人気面を心配する声も一部にはあるが、羽生事務局長は「まったく危惧はしていない。育成システムをしっかりつくり、後に続く選手を育てる」と力強く語った。

育成年代の国際交流

国内における経験に加え、環境がさまざまに異なる海外での実体験は、選手を大きく成長させる。その体験を早い段階から積ませようというのも、近年の動きだ。Jリーグは昨年、各Jクラブの下部組織から選手をピックアップしてU-15 Jリーグ選抜を編成し、海外キャンプを実施している。昨年はブラジル、今年はブラジルとドイツにチームを派遣した。また、九州のクラブが距離的に近い韓国と交流を図るなど、今後はクラブ単位で国際経験を積む機会も増えてくるだろう。

U-15 Jリーグ選抜の団長として、ブラジルキャンプに参加した山下則之Jリーグ技術委員長(JリーグHRディベロップメントグルー

プ マネージャー)は、「選手たちは、普段とは長さの違う芝やピッチの状態、相手選手のスタイル、あるいは生活環境などに、最初は戸惑う。しかし、次第にどのように対処したらいいのか、自分で考え、それを生かすようになる」と、海外における選手の成長ぶりに接している。

それでも「育成年代における国際交流は、まだまだ不足している。国内ではU-13のリーグ戦が行われ、U-14のリーグ戦も始まる。こうした年代にも海外経験を増やしていきたい。そして、世界のスタンダードを肌で感じてほしい」と、羽生事務局長は今後への期待を述べる。

また、中村、奥寺の例にもあるように、海外で活躍するためには、人格、人間性も不可

欠な要素となる。選手の育成をつかさどるJリーグ・アカデミーでは、育成年代の一環指導を通じ、人間としての成長を促すことにも力を入れている。Jリーグの国際化は、こうした活動とも無縁ではない。

世界を視野に入れるJクラブ

2007年はまた、Jリーグの国際化が強く意識された年でもあった。AFCチャンピオンズリーグ(ACL)2007における、浦和、川崎フロンターレの活躍だ。両チームはACLが現行方式となって以来、日本のチームとして初めて予選リーグを突破。浦和は見事に優勝を果たした(4ページを参照)。メディアも両チームの戦いぶりに注目したことにより、今

まではなじみの少なかった地域のサッカーについての見聞も広がった。

今回はまた、日本サッカー協会とJリーグが「ACLサポートプロジェクト」を立ち上げ、チームを側面から支援した。こうして得た経験が共有されることによって、日本サッカー界のかけがえのない財産となることは間違いない。

優勝した浦和はアジアの代表として、FIFAクラブワールドカップへの出場権を獲得した。Jリーグがアジアと、そして世界と直結していることを明確に証明したことも、大きな成果といえる。今後はJクラブの世界へ向けた意識が、さらに高まることだろう。

このACLとともに、Cリーグ(中国)、Kリーグ(韓国)とJリーグのチャンピオンが対戦するA3チャンピオンズカップも2003年から始まった。レベルの高いリーグのチャンピオンが競う大会は、出場チームが激しい対抗意識を燃やす真剣勝負。クラブにとっては、貴重な国際経験を積む舞台となる。今後はアメリカのMLS(メジャーリーグサッカー)との交流も予定され、クラブ間の国際交流は新たな段階に入る。

ACLをはじめとする国際大会におけるJクラブの活躍は、テレビ放送権やマーチャンダイジングなどにも好影響を及ぼすことが期待されている。そのためにも、まずはJリーグやJクラブ、選手たちの存在を海外で認知してもらうことが必要である。それによって、アジア市場を視野に入れる企業などとの協力関係も構築可能となるだろう。

Jリーグは現在も、あらゆる機会をとらえて、海外の進んだ情報を収集し、発展に役立てようとしている。審判の招へい、外国人審判による審判講習会の実施、外国人監督によるコーチングワークショップ開催、クラブ経営に関するGM(ゼネラルマネージャー)講座、育成年代の指導者によるJリーグ・アカデミーの海外研修、前述の理事・実行委員の海外視察など、さまざまな分野で国際化が追求されている。

さる11月7日、鹿島アントラーズクラブハウ

スグラウンドで行われたJリーグ・アカデミーコーチングワークショップの講師を務めた鹿島のオズワルドオリヴェイラ監督は、「日本サッカー協会、Jリーグが、日本サッカーの発展のために行うさまざまな取り組みへの姿勢は素晴らしい」と称賛した。羽生事務局長は「世界のサッカーは日々、進歩している。最新の情報を集め、実際に触れることが大切」と話す。Jリーグの国際化はあらゆる面で、ますます促進されていく。

【リーグ戦(J1・J2)に出場した外国籍選手 国籍別選手数】

(1試合以上、エントリーのあった外国籍選手を対象)

国籍	大会年度																
	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2007	
ブラジル	26	29	40	43	37	35	45	50	57	57	76	65	76	91	90		
大韓民国	1	1	1	1	3	8	8	11	13	11	9	8	7	10	10		
アルゼンチン	7	5	5	9	4	2		4	4	3		1	1	1			
オランダ	3	2	5	4	3	3	4	3	2	3	5	3	1				
ユーゴスラビア		3	2	2	4	8	5	4	1	2							
クロアチア			1	2			1	3	2	4	2	5	3	1	1		
オーストラリア					3	6	5	2	2	2	1					1	
パラグアイ	1	1		1		1	3	3			1	1		4	1		
ドイツ	4	5	3	2	1						1						
チェコ	3	4	1	1								1	3	1			
カメルーン					1	2	2	1		1	1	2	1				
コロンビア							1		4	1	2	2					
スペイン					4	5	1										
フランス			2	2	1	2	1	1	1								
ルーマニア						1	3	4	1					1			
イタリア		1	2	2	1	1	1										
イングランド	1	1			2	2	1	1									
ブルガリア	1					1	1				1			1	1	2	
スロバキア	1	2								1		1		1	1		
ポルトガル					2	2		1									
ウクライナ		2	2	1				1							1	1	
スロベニア					1	1			1	1	1	1					
オーストリア					1					1	1			1	1		
セルビア・モンテネグロ								1	1	1	1	1					
パナマ		1				1			1	1	1						
ロシア						1	1	1	2		1						
セルビア					1	1									1	1	
ボスニア・ヘルツェゴビナ									1	3	1						
マケドニア共和国				1	1	1						1					
コートジボワール				1											1	1	
スコットランド												1	1	1			
トルコ												2	1				
ナイジェリア					1	1	1										
ノルウェー		1													1	1	
ベラルーシ	1	1	1														
ポーランド								1	2								
ウルグアイ							1	1									
スウェーデン	2																
チリ											2						
デンマーク				1	1												
ニュージーランド			1	1													
ボリビア					1	1											
中国	1													1			
朝鮮民主主義人民共和国									1	1							
アメリカ合衆国	1																
アルバニア											1						
ウェールズ					1												
ウルグアイ/スペイン(2か国国籍)									1								
エルサルバドル	1																
ガーナ								1									
コスタリカ																1	
スイス					1												
チュニジア					1												
トリニダード・トバゴ														1			
フランス/ポーランド(2か国国籍)							1										
ベルギー									1								
ホンジュラス															1		
モンテネグロ																1	
旧ユーゴスラビア																	
旧ユーゴスラビア			1														
総計	54	58	68	74	76	86	86	94	98	95	107	94	103	114	111		

※途中で日本国籍を取得した選手、準日本人扱いとなる選手は含まない。

【リーグ戦で1試合以上、エントリーのあった外国籍選手選手数】

国籍	選手数
ブラジル	400
大韓民国	44
アルゼンチン	25
オランダ	21
クロアチア	19
ユーゴスラビア	14
パラグアイ	12
オーストラリア	10
ドイツ	7
コロンビア	6
スペイン	6
チェコ	7
イングランド	5
スロバキア	5
フランス	5
ポルトガル	5
ルーマニア	5
ロシア	5
ブルガリア	4
ボスニア・ヘルツェゴビナ	4
イタリア	3
ウクライナ	3
オーストリア	3
カメルーン	3
コートジボワール	2
スウェーデン	2
スロベニア	2
セルビア	2
セルビア・モンテネグロ	2
チリ	2
デンマーク	2
トルコ	2
ナイジェリア	2
ノルウェー	2
ポーランド	2
マケドニア共和国	2
中国	2
アメリカ合衆国	1
アルバニア	1
ウェールズ	1
ウルグアイ	1
ウルグアイ/スペイン	1
エルサルバドル	1
ガーナ	1
コスタリカ	1
スイス	1
スコットランド	1
チュニジア	1
トリニダード・トバゴ	1
フランス/ポーランド(2か国国籍)	1
ベルギー	1
ホンジュラス	1
モンテネグロ	1
旧ユーゴスラビア	1
朝鮮民主主義人民共和国	1
合計	669

【監督(国籍別人数)】

国籍	人数
ブラジル	35
オランダ	10
ドイツ	5
アルゼンチン	4
スペイン	4
ユーゴスラビア	3
フランス	3
イングランド	3
オーストラリア	3
クロアチア	2
ウルグアイ	2
ロシア	2
ボスニア・ヘルツェゴビナ	2
チェコ	2
大韓民国	2
ポルトガル	1
モロッコ	1
マケドニア共和国	1
ルーマニア	1
スロベニア	1
ベルギー	1
スロバキア	1
スコットランド	1
合計	90

※監督以外の役職で指揮したスタッフは含まない。

「エンターテインメント産業」 広報力と交流力

マネジメント・ファクトリー代表◎
芳中 晃 (よしなか あきら)



PROFILE

1953年10月生まれ。1977年12月、ポールスミス大学(アメリカ)卒業。1979年6月、フロリダ国際大学(アメリカ)卒業。同年7月、ウォルト・ディズニー・ワールド(アメリカ、フロリダ州)に入社。コンテンツホテル、およびマジックキングダム内においてスーパーバイザー業務を行う。その後、(株)オリエンタルランドに入社。東京ディズニーランド開園前の3年間は、食堂部の教育・トレーニングとマニュアル作成の総責任者。開園後、

レストラン店長、および広報室に勤める。同社退社後は、専門学校講師、講演活動、数々の大型テーマパークのプロジェクト・マネジメント、大型SPA施設、レストラン、エンターテインメント施設の企画開発、およびサービス業や一般企業の業務改善を手掛けている。主な著書は、「ディズニーランドはなぜお客様の心をつかんで離さないのか」、「女性がディズニーランドを愛する理由」、「なんともいきたくなるディズニーランドの不思議」。

「目的の再確認」

エンターテインメント産業の広報は誰のためにあるのか？ それは経営・運営する企業は勿論ですが、本来はお客様のための広報活動であることを常に忘れないことが重要であるはず。ディズニーランドでも年間1000件を超す取材がありますが、常にその情報がお客様にとって有益な情報であるか否かの判断が必要であり、その情報がいか「リピーター」として繋げられるかが勝敗の分かれ目になってきます。

Jリーグの各チームにとってマスメディアはお客様との最重要なコミュニケーションの手段の一つであることは間違いありません。より多くのお客様にサッカーの楽しさを味わってもらい、そして更にその楽しさを通じて「お客様の幸せを創造出来る」ことが広報の最終目的なのではないのでしょうか。

ディズニーランドは「世界で最も幸せな場所」と位置づけています。キャスト(スタッフ)が働く目的は「お客様に楽しい思い出を作ってもらうために全てのキャスト(スタッフ+エンターテイナー)はそのお手伝いをするのだ」と…。

「チケット価格の付加価値」

チケット価格には、どのようなエンターテインメント、サービスなどの付加価値が含まれているのでしょうか。提供するチケット価格の付加価値に、お客様は満足されているのでしょうか。

付加価値はアトラクションや試合内容・結果だけではない筈です。お客様をスタジアムで迎えるスタッフの笑顔、テナン

ト・直営に関わらず全スタッフの接客レベル・サービス内容、施設のメンテナンスや清潔感・快適性・安全性、食事の美味しさや価格、トイレの清潔感や快適性などチームやスタジアムが提供する様々なもののトータル的な総合力としての付加価値と、チケット価格が少なくとも同等でなければならない筈です。

提供する付加価値がチケット価格よりも低いと思われたお客様は不満を覚え、二度とスタジアムのライブショー(試合)を見に戻ってはくれません。ディズニーランドもサッカーも大空を背景にしたエンターテインメント。全てのゲスト(お客様)はVIPであり、毎日が初演:毎回の試合が初演であるべきです。でなければ「リピーター」は確保できません。

「理念」

東京ディズニーランドの理念は「夢と魔法の王国」ではなく「ファミリー・エンターテインメント」が理念。理念は抽象的なものに思われがちですが、エンターテインメントの世界では理念が最終形として様々なものに表現されます。ディズニーランドの水飲み場は必ず大人と子供用のペアで設置されています。親子で水を飲む時に、お互いの目と目が合うように設計され、それがコミュニケーションのきっかけ創りをしているのです。

「キーワード」

理念を具現化する具体的指針がキーワードです。キーワードは重要な順に「安全性」「礼儀正しさ」「ショー」「効率」。マスメディアを賑わす不幸な出来事は安全

性を欠いたものが90%。安全性の確保は決して表舞台には出てきません。しかし、お客様への信頼感の基盤であり、安全性(安心感)の確保なしにプラン力はありません。

「全員が広報担当」

広報担当だけが広報活動をしているわけではありません。社長以下全スタッフが広報担当です。更に、退職したスタッフ、業者さんをも含めた企業チームに関わりあう全ての人々を広報担当にすべきです。ホスピタリティーに富んだチームスタッフであれば、関わりあう人々はスタッフの代わりに広報活動をしてくれるのです。ウォルト・ディズニーはディズニーランドの建設に携わる人々全員に自らバーベキューを焼き食事を提供し、オープン前に彼らが一番に招待しました。その人々はウォルト・ディズニーのホスピタリティーに感激をし、家族や友達と話す時に、ディズニーランドの素晴らしさを伝えてくれるのです。これほど力強い広報力はありません。『交流力!』は草の根広報のコアなのです。

50年以上もエンターテインメントNo.1の地位を維持しているディズニーランド。しかし、「人財力」がなければその50年の地位も一夜にして崩れ去るのです。一步一步の皆様の弛みない努力は必ずお客様に感動を与えられると信じて止みません。

「人は誰でも、世界中で最も素晴らしい場所を夢に見、創造し、デザインし、建設することができる。しかし、その夢を現実のものとするのは、人である」

ウォルト・ディズニー



「Jリーグニュース」は100%再生紙を使用しています。